

公開講座（生涯教育）における情報処理教育

6J-3

鳥巢 泰生

大手前女子短期大学

1. はじめに

近年、一般成人に対する生涯教育の重要性が増大しているという認識の下、国・地方公共団体および諸団体により、種々の講座が開かれており、コンピュータに関する講座も例外ではない。筆者の所属する学園で行われた公開講座の経験をもとに、公開講座における、一般情報処理教育の抱える問題点や講座のありかたを考察する。

2. 公開講座の現状

文部省における生涯学習推進体制の整備は、昭和63年、生涯学習局が設置された時から始まる。そして、全国の大学の公開講座は、平成6年度には、6190講座が開設され、約62万人が受講している。

大手前女子短期大学においても、「地域に開かれた大学」の名の下、教育研究成果、教育スタッフ、教育設備を直接地域社会に開放し、地域住民等に学習機会を提供するため、平成元年より、伊丹市教育委員会の協賛・指導を仰ぎ、公開講座を毎年行っており、今年9回目を迎えた。毎年テーマを設け、それに見合った内容の講座を数回にわたって行っているのだが、昨年度より、今まで行っていた講座とは別に、夜間の部として、情報処理に関する講座を、1講座6回（1回約2時間）で開講している。

3. 情報処理教育の目的

大学・短大・高専を問わず高等教育機関における
Information Processing Education at Open
Lecture
Yasuo Tosu (Email: ytosu@otemae.ac.jp)
Otemae Jr. college

る情報処理教育の目的は、情報処理学会[IPSJ91~95]において詳しく分析・指摘されているように、あくまでコンピュータサイエンスの理解、あるいはコンピュータサイエンスを骨子においた物の見方・考え方の理解である。これは公開講座においても同様であると考える。

4. 情報処理教育の問題点

社会人に対する公開講座における情報処理教育の問題点を、短大における情報処理教育の在り方や問題点と、比較して考察してみる。

1) 時間的余裕が無い。

公開講座と言う性格上、1講座12時間程度で一応は完結しなければならない。

2) 操作技術知識を求める傾向が強い。

時間的余裕が無いのともあいまって、即戦力となりうる、あるいは目にみえて上達する特定ソフトウェアの操作技術知識を求めて受講する傾向が強い。

3) 受講生のバラツキが大きい。

年齢だけにとっても10代から60代の老若男女が対称になるし、受講動機も、既にコンピュータは利用しているがもっと深く理解したい方、現在の職業や趣味に活かしたい方から、単にコンピュータとはどのような物か触って見たい方まで、知識・能力・目的までさまざまである。

4) 開講科目が絞られる。

公開講座の目的の一つに、地域社会の人に対する啓蒙活動と言う一面がある以上、ある程度地域社会の人が興味をもつであろう開講科目にし、受講生を集める必要

がある。従って学校のカリキュラムのように「必要だ」だけでは公開講座として成り立たない。

5) 授業評価が得られにくい。

一回きりの受講生が大半のため、公開講座終了時のアンケートやその後のコンピュータ利用状況などの追跡調査が行いにくい。

5. 情報処理教育のカリキュラムの提案

高度情報化社会に対応する情報リテラシー教育として、情報を読み取る能力、情報を発信する能力、そのためにコンピュータを使用する能力（操作技術）、を何か一つの課題を解決することにより学習する方法をとる。

教室の環境としては、1人1台のLAN接続されたコンピュータ、受講生4～5人に1人の割合でTAがついた環境で実施する。

- 1) 情報処理概論 情報処理科学の講義
- 2) 受講者個別の問題点と解決方法の検討
情報収集方法と発進方法の検討
- 3) 操作技術の学習
- 4) 問題解決へ向けた実習作業
- 5) 自己評価および発表

本学で行った6日間コースでは、1) 2) 3)を前半の3日間で行う。情報処理の概論を講義するとともに、実習で使うソフトのデモンストレーションや、どのような事が出来るかの説明を行う。また操作の導入部分の実習講義をする。その間に受講者個別の問題点を整理していただきその問題解決にコンピュータをどのように利用したいか、あるいはどのように利用できるかを明確にさせていただく。その後、それぞれ受講者別の作業を、1日でどこまでの作業を完結するか予定を立て作業に入る。煩雑な業務に関しては、2日間で完了できるぐらいの業務にモデル化して作業に入る。後半の3日間は、操作技術の習得を主な目的とせず、

問題解決を主目的とする。したがって、操作技術的に遅れそうな受講者に関しては、積極的にTAが手を貸し、それでも予定より遅れた分は、次回までにこちらで作業を完了しておく。最終回に思い通りに問題解決に至ったかどうかの検討を行い、これからの課題として明らかにする。

6. おわりに

公開講座のあり方をいろいろ検討し、不安を持ちながらも開講してきた経験から、学生と違って社会人の場合、「何のためにこれをするのか」、「これを覚えれば何が出来るのか」、あるいは「これを利用すれば仕事に活かせる」等を、自らの人生経験や社会経験を活かして発想する基盤が出来ている。操作技術の修得は確かに若い学生の方が早い、さてその技術を持って何の情報を処理するかと言うのが、なかなか考えられない。それに対し社会人では、仕事のことや趣味のことなど「こういう情報を発信したいのだがそれにはどうすれば良いか?」「こういう処理をしたいがそれにはどうすれば良いか?」と言う疑問になり次の学習に継続していけると感じられた。今後は授業評価の取得に努力しカリキュラムの改善を行っていきたい。

参考文献

1. 平成8年度教育白書 我が国の文教政策
第1部第1章 生涯学習社会の課題と展望：文部省
2. 体系的な情報教育の実施に向けて：情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議「第1次報告」
3. IPSJ 91～95：情報処理学会
4. 平成4年～7年度 情報処理教育研究集会講演論文集：文部省